

# 秩父農工科学

(ちちぶのうこうかがく 埼玉県)

秩父の自然で生まれ育った  
明るい選手たち。  
打ちだしたら止まらない豪快な  
野球で地元で明るい話題を送る！



自信満々の表情で  
夏に向けて自信を  
見せる選手達。

秩父農工科学高校の野球部は今年の春の埼玉県大会でベスト16に進出した。近年は上位に進出することも増え、全国的にレベルの高い埼玉県でも存在感が高まってきている。

グラウンドは両翼約90メートルと大きい。定時制があるために付けられている照明もあり、野球をやるには恵まれた環境だ。

## 波に乗ると怖いチーム

チームは、「打」に自信を持っている。打撃の良い選手が多く、どこからでも連打が続きビッグイニングを作り出す。「誰かが出塁したら、絶対に自分が返す」という強い気持ちも、連打を生む要因になっている。打線が繋がり波に乗ると、守備面でもミスが少なくなり有利に試合を進めることができるという。

1死3塁の場面でもほとんどスクイズはやらず、打たせて内野ゴロでも(3塁走者を突っ込ませて)点を取る。それは「野球は打って楽しむもの」という増井監督の考えでもある。

「講演でストライクは『投手が打ちやすい良い球を投げているのだから強く叩きなさい』という意味がある」という話を聞いた」ということもこの考えに影響を与えている。



右上/坂道ダッシュ。打撃に必要な下半身を鍛えるため、シーズン中も行っている。  
 左上/ティーバッティング。雨でグラウンドが満足に使えなくても、打撃の強化は怠らない。  
 下/グラウンドに礼。練習で使ったグラウンドに感謝の気持ちを表すことで、人格の形成に役立っている。



上/チームを率いる増井監督。  
 「野球は打って楽しむスポーツ」という考えがあり、「選手たちに野球を楽しんでもらいたい」と試合では積極的に打たせている。



練習メニューは増井監督がトレーニングや野球のセミナーに足を運び、良いと思ったものを積極的に取り入れて作られている。

普段の練習は6対4からの割合で打撃練習が多い。シーズン中もウエートトレーニングやスピードトレーニング、ランニングなども積極的に行う。土台となる下半身の強化など体作りを続けていることが、強い打球を生み出す一因になっている。

投手育成に関しては1年生には変化球を投げさせないでストレートだけ投げさせている。ストレートの球威・球質やコントロールを磨き、少ない球種でいかに打ち取るか工夫をするように考えさせる狙いがある。

練習が終わりグラウンドから出る時は全員で礼を行う。きちんとしたあいさつをすることで人格を形成し、声を出す練習として以前から行われているという。

注目選手は2番を打つ大嶋選手と4番を打つ高田選手。

大嶋選手はまじめな性格で主将としてもチームを引っ張る。チーム1の俊足で、100メートルのタイムは陸上部を除くと校内トップ。「おいしい所を持っていく」と監督が評する勝負強さも光る。高田選手は努力家で野球をよく知っている選手。打者としては長打力が魅力で、捕手としても送球時に捕ってから投げるまでが速くなるなど成長を続けている。「彼らが打つとチームが乗って行ける」と増井監督も期待する存在だ。

このチームの特徴をよく表した話がある。春のプロック予選の初戦、シード校・松山との試合。2-1と1点ビハインドで迎えた9回。2死2塁から4番・高田選手の三遊間へのゴロが相手のミス誘い、そこから3点を取って逆転。5-3でこの試合を制した。

ここで劇的な勝ち方ができたおかげでチームとして乗ることができ、春の県大会ベスト16へとつながった。

このようにちょっとしたきっかけを生かし、自分たちの力に変える強さがある。



上ノのどかな自然に囲まれた、広いグラウンド。秩父の山々をバックに、選手たちが躍動している。右ノグラウンドに設置された照明。夜遅くまで練習できる環境がチームを強くする。



## 「地元の人に応援される 「おらが町のチーム」

1900年に、秩父郡立乙種農業学校として開校した秩父農工科学高校。現在は農業系、工業系、家庭科系の計8学科がありそれぞれにユニークな学習、実習がある。

食品化学科では地元で採れる果物を使ってジャムを作り、それを店頭で生徒たちが売るということも行っている。

引間克幸氏（元阪神）、板倉康弘氏（元オリックス）などプロ野球に行ったOBもいる。

その他にもプロレスラーの田上明氏、お笑いグループ・バナナマンの設楽統氏、アニメーション監督の神山健治氏など各方面で活躍するOBも多い。剣道部や男子ソフトボール部も強豪だ。

地元でも伝統のある高校として知られ、野球部の選手はほとんどが地元出身者だ。増井監督も同校のOB。グラウンドの後ろには山も見えるなどのどかな環境で育った選手は、元気良くのびのびと練習をしている。

「高校野球は地元の選手でやるもの。だからこそOB、OG、地元の人に応援されるようなチームであり続けたい。プレッシャーはあるがそういう人の期待にこたえたい」（増井監督）

選手たちは「シード校なので無様な試合は見せられない。春はベスト16までいったので、夏はベスト8以上を目指す」と意気込む。

秩父の人間で構成され、秩父の自然の中で成長し続けてきたチーム。まさに「おらが町のチーム」と言えるだろう。

そんな秩父農工科学の夏の大会の初戦は、妻沼との対戦。県営大宮球場で、7月10日の14時から開始予定となっている。